

## 「春の小石川植物園(3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

春の小石川植物園といえば、何と言ってもサクラだ。しかし東京大学の附属施設であり、「植物の多様性の保全」を理念の一つとしているこの植物園には、国内外に自生する植物の、相当数(種、亜種、品種など)が育てられている。この時期、サクラに目を奪われがちだが、是非他の植物の「春の姿」も観察したい。



ソメイヨシノの桜の林を過ぎると、急に人影がまばらになる。奥の森に続く道だ。この道沿いでも春の自然観察を十分に楽しむことができる。



森のはずれで、鮮やかな黄色い花の灌木が目についた。遠目には「レンギョウ」のように見えたが、植物名の札を見ると「シナミズキ」という聞きなれない名が記されている。シナミズキは「支那水木」の意味で中国原産の灌木である。学名の属名 *Corylopsis* は「兜のような」種小名の *sinensis* は「中国の」という意味だそう。ラテン語やギリシア語がわかると、学名の意味を理解できて楽しいだろう。



シナミズキ *Corylopsis sinensis* (マンサク科)

花に近づいて見ると、ロウバイ(蠟梅)のような透き通った黄色の花弁で、実に美しい。やはりサクラだけに目を奪われてはいけなかった。



しばらく歩くと、また似たような花をつけた灌木があった。こちらは「トサミズキ(土佐水木)」である。



トサミズキ *Corylopsis spicata* (マンサク科)

シナミズキとよく似ている。素人にはほとんど判別できないだろう。高知県の岩石地帯(蛇紋岩)に自生しているそうだが、花の美しさから庭木として好まれているという。このような花の付き方が「穂状花序」と呼ばれることもはじめて知った。勉強になる。